

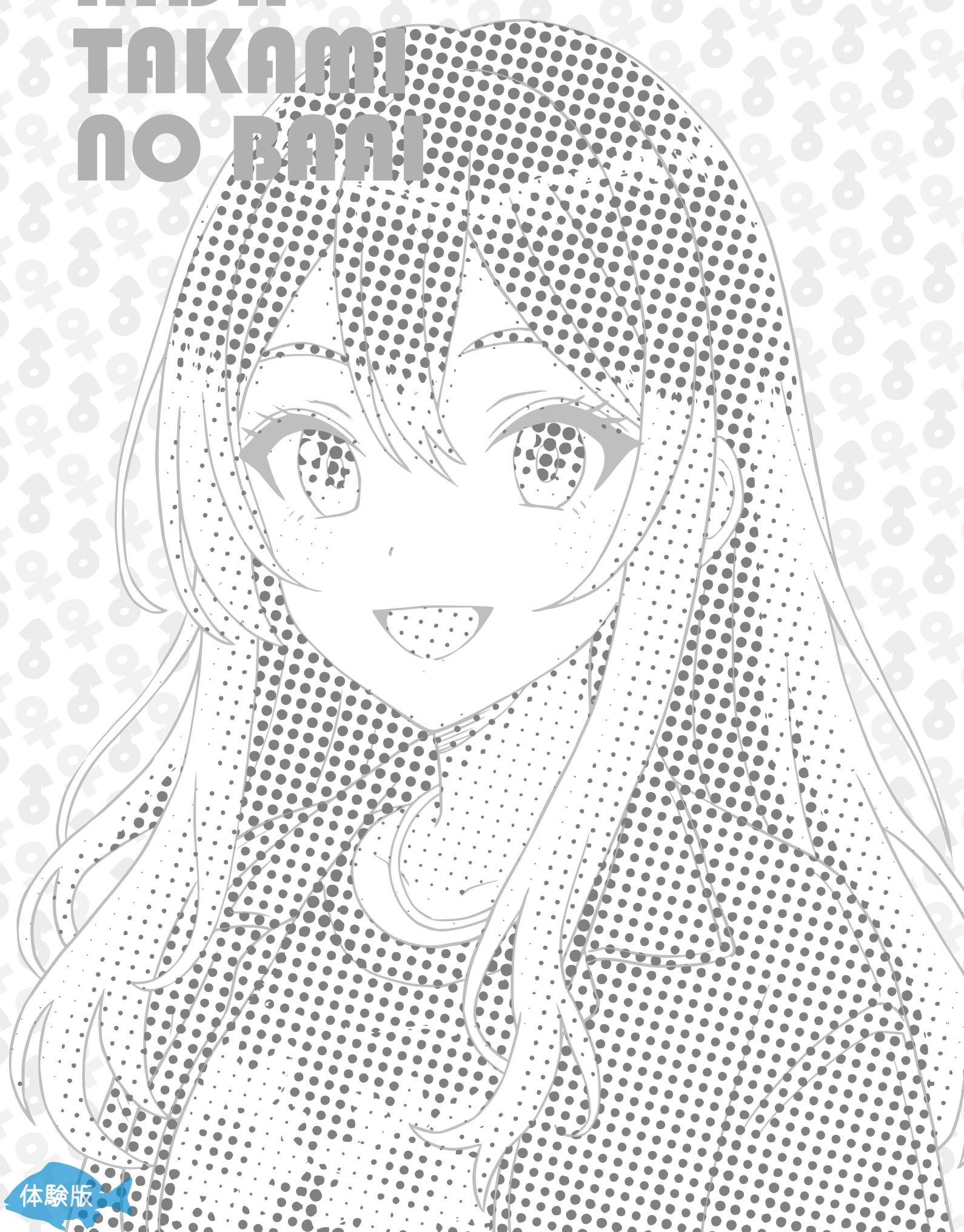
TSFコア 恋愛系

恋慕
年下・年上
幸せエンド

アイガ
タカミ
Q場合



AIDA TAKAMI NO BANAI



体験版

目次

登場キャラクター	4 ページ
第1章 協力プレイ	5 ページ
第2章 店番の暇潰し	24 ページ
第3章 神隠しの夜	48 ページ
第4章 時間の迷路	66 ページ
第5章 封印プレイ	75 ページ
あとがき	83 ページ
作品紹介	84 ページ



登場キャラクター

■ 相田 貴義／貴美（アイダ タカヨシ／タカミ）

主人公。二十四歳。客の少ない生活雑貨屋を一人で切り盛りしている。
線が細く、どこか陰がある。友達は少ない。

■ 遠野 和樹（トオノ カズキ）

二十歳。区役所職員。地域振興課勤務。
元サッカー部。万年補欠だった。

三年前、主人公に告白して振られた過去を持つ。



第1章

協力プレイ



体验版

——俺は佐々木商店のレジの奥で、和樹のペニスにまたがっている。

佐々木商店は、食料や生活用品をあつかう雑貨屋だ。店は港町を囲む山にある。昔は栄えた場所だったが今では空き家が多い。そのため客は少なく、日々の売り上げはわずかしかない。

俺、二十四歳の相田貴義^{あいだかよし}は、この雑貨屋を一人で切り盛りしている。俺は、この店のオーナーの子供ではない。頼みこんで働かせてもらっている部外者だ。店員をしているのは、過去の後悔をぬぐい去るためだ。

数日前までの俺は、レジカウンターの奥の椅子に座り、ぼうっと一日を過ごしていた。しかし今は違う。『Eゲーム』という謎のゲームを攻略している。

俺は相田貴美^{あいだかよみ}という女性になり、パンツを足首まで下ろしている。そして、椅子に腰かけた遠野和樹^{とおのかずき}の上に座り、ペニスを膣に収めている。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『店番セックス』を達成しました。相田貴美は3ポイントを獲得しました！』

スマホから女性の声が響く。

俺はレジのカウンターに置いたスマホを確認する。画面には『Eゲーム』のチャレンジリストが表示されている。店番をしながらセックスをするという項目が消えて、新しい項目が追加された。俺は、和樹のペニスを挿入したまま、リストを確認する。



——店番をしながら、中出しをする。5ポイント。

——店番をしながら、おっぱいを出す。1ポイント。

——店番をしながら、挿入三十分間。10ポイント。

俺はリストをじっとにらんだ。

「あの、俺は、これからどうすればいいんでしょうか？」

四つ年下の和樹が尋ねてくる。和樹は仕事の途中でスーツを着たままだ。ズボンのファスナーだけを下ろしてペニスを俺の中に入れている。

「三十分間、立たせ続けろ」

「分かりました。三十分間ですね、って、けつこう長いですよ！」

「ちつ、使えない奴だな」

和樹のナニが、ふにやふにやになる。俺に愛の告白をしておきながら、萎えさせるとは何事だ。

「おまえ、もう少しがんばれよ」

「でも、貴美さん。朝から仕事をさぼって、ずっとセックスをしているんですよ」

「おまえ、協力プレイをしてくれると言ったよな。1万ポイントを手に入れるまで、付き合ってくれるって宣言したよな。あれは嘘か？ もし嘘なら、他の奴にチエンジするぞ」「大丈夫です！ やらせてください！」

和樹は、泣きそうな声で返事をする。



「あの、貴美さん。おちんちんを立たせるために、おっぱいをもんでいいですか？」

和樹は、俺の服の下から手を入れながら尋ねてくる。和樹は俺が答える前からもみはじめた。

「膣に入ったペニスが大きくなる。俺は胸をもまれながら、うしろの和樹に話しかける。

「おまえ、おっぱい好きだよなあ。男のときの俺に告白してきたくせに」

「貴美さんに付いているから、さわっているんです。触感は気持ちいいですよ」

「俺は、なんだか変な気分になるよ」

実際、胸をもまれると、ふわふわした気分になる。

「服、上げていいですか？」

「いやいや、客が入ってきたらまずいだろう」

「でも、下半身は裸でおちんちんを入れていますよ」

「客が来たら、さつきのように毛布をおまえの上にかける。これで客からは、ばれないから」

「いや、絶対にばれますよ。さつき、カツラーメンを買ったおばあさんの声、うわづつていましたし」

「どうか、ばれていたのか。

自分の顔が赤くなるのが分かった。羞恥を感じると、ペニスを覆っている膣がきゅうっと締まつた。





「貴美さん、締めすぎです」

「男だろ、我慢しろ」

「貴美さんは本当に暴君ですね。俺、好きにやりますよ」

和樹は、俺の服を上げておっぱいを露出させた。そして、両手で俺の腰をつかんで立ち上がった。

ひつ

俺は慌ててカウンターに手を突いた。おっぱいもお尻も露出した状態で、下半身を持ち上げられる。

「こら、客が来たらどうするんだよ！」

和樹は俺の腰をつかんだまま、自分の腰を前後する。ゆっくりした、ぎこちない動きだ。俺はイラッとする。手早く済ませるんじやなかつたのかよ。妙に遅い動きのせいで、お尻の辺りの感触が気になつた。

ペニスが奥に入るたびに子宮口が小突かれる。それと同時に、和樹の腰に自分のお尻が密着する。

和樹は、スースのファスナーだけを下ろしてペニスを出している。そのため突かれるたびに、ズボンのなめらかな生地にお尻が触れる。そのせいで自分が肌を露出しているのを意識させられる。



大きくなつた臀部を両手で抱えられて、和樹の細くて長いペニスで膣内をこすられる。肉のひだを優しくなでる和樹のペニスは、もどかしさを感じさせた。もつと、強く激しくかき回してくれればいいのに。そう思い、膣を締めて肉壁と肉棒を密着させた。

「ああん、ああん」

気がつくと声が漏れていた。強くなつた刺激に反応したものだ。反応は口だけではない。両目の端に涙がにじんでいる。口元にはよだれが垂れている。

「貴美さん、トロ顔になっています。あと、下、びしょ濡れです」

「言わなくていいから、そういうこと！」

振り向いて文句を言おうとしたら、亀頭が奥でコリッと動き、感じやすいところを刺激した。下半身が、びくびくと痙攣する。俺は思わず片手で口を押さえて、声が漏れないようとした。

「三十分は無理だから、もう出します」

真面目に言われて、もういいやと思つて脱力した。腕を曲げて、カウンターの上にぺたりと乗る。

息が荒くなってきた。頬が紅潮してきた。下半身に意識を集中して、中に入っているペニスの形を想像する。

陰茎が鉄の棒のように硬くなっている。亀頭が限界まで膨らんでいる。そろそろ来るなと分かる。この数日で何度も中出しされている。そのため、タイミングが計れるようにな



つてきた。

「うつ」

和樹が短く声を出して抱きついてきた。俺は、上から覆いかぶさられた状態で、中に精液をぶちまけられる。

下腹部に熱が広がる。白いネバネバした塊が注ぎこまれる。ひゅーひゅーと声にならない呼吸をする。全身に大量に汗をかいていた。おそらく汗のにおいが立ちのぼっている。和樹は俺の首筋に顔をうずめてにおいをかいでいた。

「ひやつ」

カウンターに触れている胸を和樹がもんできた。余韻にひたつていたところに刺激を与えられて、声が出てしまった。

胸をもまれたことで収縮していた膣の入り口がゆるんだ。俺の下の口は、鯉の口のように、ぱくぱくと動きながらペニスを愛撫している。ぼうっとしながら胸をもまれ続ける。しだいに体の熱が冷えてきたので、和樹に抜くように指示を出した。

「抜きます」

和樹がゆっくりと男性器を引き抜いた。だらしなく開いたままの膣口から精液が糸を引いて垂れる。物欲しそうに開いたままの入り口を閉じようとしたが駄目だった。何度も力をこめたら、だらりと精液がこぼれてようやく入り口が閉じてくれた。

「ふいてくれ」



全身に力が入らない。動くのがおっくうだったので命令する。

「その前にきれいにします」

和樹は俺の股間に顔を付けてなめはじめた。べちょべちょになつた性器の周りの愛液をなめ取っていく。

「ううんっ」

俺は、背筋をぶるつと震わせる。心地よい快感が、股間から背骨にかけて広がっていく。和樹は舌を伸ばして、穴の中を掃除していく。俺の愛液と、自分の精液が混ざった液体を吸い出しては飲みこんでいく。俺は何度か体を震わせて、カウンターから落ちないように我慢した。

「きれいになりました。ティッシュでふきますね」

その頃には俺は、カウンターの上で深く呼吸するだけの置物になっていた。股間をティッシュで優しくふかれた。自分で下りられますかと言われて、無理、と声を返した。

和樹は俺の体を抱え上げて、椅子の上に座させてくれた。背もたれに体重を預けて、俺は大きく息を吐く。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『店番おっぱい出し』を達成しました。相田貴美は1ポイントを獲得しました！』

『コングラチュレーション！ チャレンジ『店番中出し』を達成しました。相田貴美は5ポイントを獲得しました！』



カウンターに置いていたスマホから声が聞こえてくる。

「挿入三十分間の10ポイントをもらえたかった」

俺は和樹に恨みがましく言う。

「すみません」

「でもまあ、6ポイントもらえたから許す」

俺はすねたように声を出す。『Eゲーム』の画面を見た。チャレンジリストが更新されていた。

——店番をしながら、お掃除フェラ。2ポイント。

——口に精液を含んだまま接客。10ポイント。

——客の前でセックス。20ポイント。

挿入三十分間は消えていた。その代わりに、新しい項目が三つ増えていた。

「貴美さん、最後の一つはちょっと無理ですね」

画面をのぞきこんで和樹が言う。

「二つ目も無理だよ。しゃべったら、精液が口から漏れるだろうが」

ちらりと和樹の下半身を見た。スーツのズボンから、濡れたペニスが露出している。俺は髪をかき上げて股間に顔を近づけた。

「お掃除フェラ、してやるよ」

ペニスがわざかに持ち上がった。そのタイミングでぱくりとくわえて、舌で丹念になめ



取っていく。根元から順番に、陰茎、亀頭と掃除をしていき、愛液と精液を飲みこんでいった。

尿道口に残った白い粘液を吸い取る頃には、ふたたびペニスが勃起していた。
「おまえ、終わったんじゃねえのか？」
「口に精液を含んだまま接客しませんか？」
「はああ？」

怒りを含んだ声を返す。和樹が俺の頭を両手でつかみ、口の中にペニスをねじこんだ。今射精したばかりなのに、そんなに連續して精液は出ないだろうが。しかし和樹は諦める気はないらしい。

仕方がない。少し相手をしてやるか。

こいつがサカっているのは俺の責任もある。『Eゲーム』のポイントを稼ぐために、チャレンジリストを次々にこなしている。矢継ぎ早の変態プレイを続けたら、歯止めが利かなくなるのも理解できる。

俺は数日前のことと思い出す。

店番で暇を持て余しているときに、ダイレクトメールが届いた。そこに書いてあった『Eゲーム』をインストールしたことで全てがはじまった。俺の体は女になり、チャレンジリストをこなすとポイントが入った。

重要なのは、一万ポイント集めると願いを一つ叶えると書いてあったことだ。



ふつうなら無視する内容だ。しかし、人間の性別を一瞬で変えることができる不思議なアプリ。一縷の望みを託して俺はチャレンジをはじめた。リストに、一人ではこなせない内容が出てきたので、俺を慕っている和樹を利用した。

口にくわえた和樹のペニスが硬くなってきた。亀頭が張り詰め、薄い皮膚がぴんと張る。頭を押さえられ、喉の奥まで先端を押しこまれた。呼吸ができない。鼻からなんとか空気を得ようとするが、喉が完全にふさがっている。

俺は両手に力をこめて和樹の腰を押す。陰茎を半分ぐらい離したところで口の中に精液を放出された。和樹が頭の拘束をゆるめる。俺は鼻で呼吸しながら、口の中に注ぎこまれたザーメンをどうしようかと考えた。

口に精液を含んだまま接客すれば10ポイントだった。本当にやるのか？ 出し終えた和樹は、ティッシュペーパーの箱を持って屈んだ。客から見えないようにカウンターの中に隠れているつもりらしい。和樹はペニスをぬぐって、いそいそとズボンの中に収めている。

店の入り口の来客チャイムが鳴った。タイミングを失った俺は、にこにこしながら店内に顔を向ける。老婆が棚の洗剤を選んでいる。

いつまで口に精液をためていたら、チャレンジクリアになるのだろう。そう考えた直後、慌ててスマホの音をオフにした。大音量で口内精液接客などと言われたら困る。

「これ、お願ひしますね」



老婆はレジのカウンターに洗剤の箱を置いた。値段は覚えている。出されたお金のお釣りを計算してトレーの上に硬貨を置いた。

「あら、遠野くんもいたの？」

老婆はカウンターの中で身を縮めていた和樹に、老婆は気づいたようだ。

「はは、ちょっと寄りまして」

和樹は立ち上がり、へらへらとした表情を見せる。老婆と和樹が長話をはじめそ�だつたので俺は警戒した。口に精液を含んだままだと、いつこぼしてしまうか分からない。

老婆に見えないように和樹を軽く蹴って、黙れと威圧の目を送る。和樹はカウンターの外に行き、老婆を店の外に連れ出した。

俺はスマホの画面を確認する。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『口内精液接客』を達成しました。相田貴美は10ポイントを獲得しました！』

ポップアップダイアログに、チャレンジクリアの文面が表示されていた。

もう口に含んでいなくとも構わないよな。俺は喉をごくりと鳴らして飲みこんだ。

「うへえ」

喉ごし最悪だった。味もまずい。うがいをして、口の中をきれいにしたかった。

パンツを上げて、しわくちゃになつたスカートを伸ばした。床には精液と愛液が混ざつたものが落ちている。あとで掃除しないとな。それよりもまずは、うがいだ。



俺はレジを離れて、居住スペースの台所に移動する。コップに水を入れて口をゆすいでシンクに吐き出した。口内のザーメンの感覚は残っているが、だいぶすつきりした。

「おばあさん、外まで送つてきました」

和樹が台所に入ってきた。

「店番、誰もいないぞ」

「閉店のプレートを、表にかけてきました」

「おまえなあ、勝手に」

和樹が唇を重ねてきた。いやな気はしなかったので、されるにまかせた。

「俺、貴美さんが——貴義さんが、男でも女でも好きです」

「知っているよ。三年前に、おまえが高校生の頃に告白されたからな」

「その時は、未成年だから、そして同性だからと振られました」

「責任ある大人の対応だよ。それに俺は異性愛者だからな」

「今、俺は成年です。そして俺と貴美さんの性別は異なります。だから異性愛者の貴美さんにとって、俺と付き合うことは問題ないはずです」

「うーん、俺は、の方が好きだという意味で言つたんだがな」

俺はコップに水を注いで一杯飲んだ。和樹は目をそらさない。引き下がる気はなさそうだ。

「俺は四歳年上だしな」



「年齢差は、年を取れば気にならなくなります」

「そもそも恋愛の対象ではないしな」

「でも、セックスをするつてことは、嫌いじゃないんですよね」

「面倒だな。そう思うとともに罪悪感を覚える。

四歳差って、俺と柚子ねえとの年齢差と同じなんだよな。年上の相手に恋心を抱く気持ちは、俺にも経験がある。

「結婚してください」

「嫌だよ。それよりも、チャレンジリスト、どうなっているかな。確認しねえとな

「スマホ、持ってきました」

俺はコップをシンクに置いて、和樹からスマホを受け取る。画面を確認するとリストが更新されていた。

——濃厚なキス。1ポイント。

——仕事をさぼって一時間セックス。5ポイント。

——妊娠。5000ポイント。

最後の項目を見た瞬間、顔が赤くなり、耳まで熱くなつた。和樹が結婚を迫ってきた理由が分かつた。俺は、指で首元の髪の毛をかき上げる。空気を入れて熱を逃がしたかった。

「この体、妊娠するのかよ」

アプリで無理矢理女性にされた。形だけの変化だと思っていた。受精、妊娠、出産、そ



うした先のことは考えていなかつた。

「ちまちまとポイントをためても、1万ポイントなんて届かないですよね。俺、貴美さんを妊娠させます。そのあとの責任は取ります」

和樹は、俺の腰に左手を回して抱き寄せた。そして唇を重ねて舌を入れてきた。俺は和樹の接吻を受け入れて舌をからめた。男の太い舌と、女の細い舌。二つの肉の塊が、たがいを求めて混じりあう。

自分の意思とは関係なく、体が火照っていくのが分かる。じわりと汗をかき、女のにおいを立ちのぼらせる。股間は湿り気を帶び、ふたたび充血しあげはじめる。

しばらく唾液を交換したあと、ゆっくりと唇を離した。

「俺を、自分の女にする気か？」

「性別なんてどうでもいいんです。貴美さんと交わりたいんですけど」

「おまえ、エツチだな」

「そんなトロ顔をしている人に言われても」

「ああん？ 俺、そんなにエツチな顔をしているのか？」

「しています」

俺は恥ずかしさを隠すために横を向く。

「仕事をさぼって一時間セックス。好きなだけ中に出せ」

「それじゃあ——」



「もろもろは、妊娠したら考えてやるよ」

「がんばります」

「ひあつ！」

俺は和樹に抱きかかえられた。いわゆるお姫様抱つこというやつだ。

男の頃の体だと、こんなことはできなかつた。俺は自分の体が女であることを自覚する。階段をのぼり、二階の寝室へと運ばれながら軽くキスをされた。俺は拒絶せずに身をまかせた。

ベッドの上に横たえられた。和樹はスーツを脱ぎ、裸になる。万年補欠だつたとはいえ、高校のサッカー部で鍛えていた体は筋肉質だつた。

俺がぐつたりしていると、パンツを脱がされた。そして服を上げて、おっぱいを露出させられた。そのまま俺とセックスをしようとしてきたので、いつたん止めさせた。

「きちんと、服を脱がせろよバカ」

「じゃあ、裸にします」

スカートを脱がされ、服をはぎ取られた。ブラジャーも取り除かれ、一糸まとわぬ姿になつた。

「貴美さん、肌、きれいですよね」

和樹は、俺の胸から腹にかけて指先を這わせる。その指の動きに合わせて、ぞくぞくとした快感が走る。



女性の体になつてから数日しか経っていない。昔から女性だった人と違い、体に傷や劣化はない。赤ん坊の頃から温室で育てたような無垢な美しさのままだ。

和樹は、おへその辺りにキスをする。何度もキスをしながら、下腹部や太ももに刺激を加えていく。もどかしかった。軽すぎる刺激でじらされている。苦情を言おうとしたら、愛撫は胸に移つた。軽くもみ、乳輪の辺りにキスの雨を降らせる。乳首にだけは触れない。そのせいで、刺激を求めた乳首が限界まで膨らんでいく。

爪の先で、軽く乳首をこすられた。反応しようとすると、その反応を抑えこむように乳首全体をつままれる。全身が反応して丸くなる。

ふたたび、ヘその辺りのキスに戻つた。和樹は、軽い刺激から愛撫をやり直す。

頭がぼうつとしている。どれぐらいの時間、前戯をされているのか分からなくなつてきた。

腰に両手がかかり、ぬるりとペニスが入つてきた。あまりにも自然な挿入に、体が完全に脱力しているのが分かつた。

とんとんとんと、一定のリズムで腰が打ち付けられる。その動きに合わせて、自分の口から喘ぎ声が漏れる。

汗を大量にかいていた。まき散らすほど愛液を流していた。目からは涙がにじんでいる。口からはよだれが漏れている。全身からさまざまな液体を垂れ流している。自分の体が、ローションをたっぷりと染みこませた、シリコンの筒になつている気がした。



皮膚と皮膚が触れあつた場所が、汗でぬるぬるしている。キスを求められたので和樹の口の中に舌を入れる。舌からむとペニスが大きくなつた。自分の膣内も大きくなつて男性器を愛撫する。二人は混ざりあい溶けあう。和樹は、背中に回した腕にぎゅっと力をこめた。

膣内で爆発するように白い液体が放出される。ゼリーのように形を保つたザーメンが、子宮の入り口に叩き付けられる。

体の深いところが、ずっしりと重くなつた。缶コーヒーを体内に埋め込まれたような重量感。どれほどの精液が注ぎこまれたのだろうと考える。

俺は脱力して四肢を伸ばす。和樹は俺に抱きついたまま、体をふるふると震わせている。

「よくがんばったな」

頭をなでてやつた。和樹は、まだ挿入したまま腰をゆっくりと動かしている。刺激は続いているが少し落ち着いた。俺は和樹に抱きつかれたままスマホを手に取つた。

濃厚なキスの1ポイント、一時間セックスの5ポイントが入つていた。そんなに長い時間交わっていたのかと思い、時間を確認する。

一時間以上経っている。前後不覚になるぐらい前戯をされたしな。妊娠の項目はそのままで、新しいチャレンジが追加されていた。チャレンジをこなしてもいいが、さすがに仕事をした方がいいだろう。

「おい、和樹。そろそろ抜け。おまえも、仕事をさぼつてここに来ているんだろう。そろ



「そろ仕事に戻れ」

「貴美さんと離れたくないです」

俺はため息を吐いて頭をかく。

「おまえ、子供か？」

「貴美さんは子供ですよ」

「いいから仕事に行け」

「結婚してくれますか？」

「しねえよ。でもまあ、今日の夜、仕事が終わったら相手をしてやる」

「分かりました。がんばって貴美さんを妊娠させます」

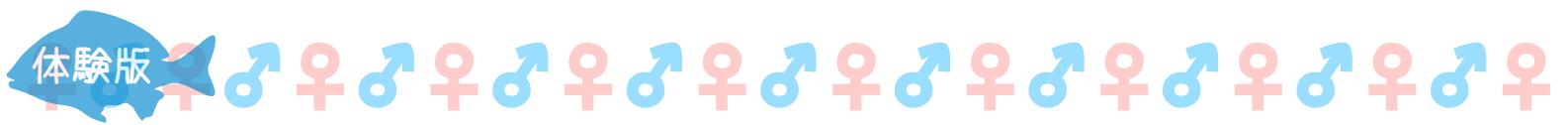
「バカ」

俺は、ポカリと和樹の肩を叩く。それから一人でもぞもぞと動き出して、べとべとになつたたがいの性器をきれいにした。そしてシャワーを浴びて、汗とにおいを体から落とした。





第2章 店番の暇潰し





——時間は少しさかのぼる。

四月になつた。佐々木商店の店員になつて、六年が経過した。家業を継いだというわけではない。俺の名前は相田で、佐々木家の一員ではない。

佐々木商店は、生活用品を売る小さな雑貨屋だ。客は日に数人しか来ない。繁華街からは遠く、周りの家の多くが空き家になつてゐる。

「マジで暇だな」

レジのあるカウンターの中で、俺はぼやいた。

この店と家を維持しておきたい。そうした思いで、地元出身の俺は、頭を下げて店員になつた。しかし、そろそろ限界が来ている。

店は、二階建ての一階の一部を利用したものだ。土地と建物は、俺が佐々木おばさんと呼ぶ、佐々木芙美子の所有物だ。借家ではないから急に潰れることはない。問題は、俺の給料に充てるほどの儲けがほとんどないことだった。

掃除と仕入れだけは行き届かせて、店番を続いている。客の来ない時間は、スマホでネットを見て時間をつぶしている。

ピコン！

メールが届いた。仕入れ先からの新商品のお知らせかなと思い確認する。ゲームのダイレクトメールだった。なんだよ。こっちは課金しようにも金がねえんだよ。そう思いながらもいちおう読んだ。無料の範囲内なら、暇潰しになるかもと思つたからだ。



ゲームの名前は『Eゲーム』というらしい。ちょっとエッチな内容だそうだ。Eはエロのことかと思いながら説明を読む。ポイントをためて、あなたの願いを叶えようというアオリ文句が書いてある。

あなたの願いかと、俺は思う。

「今も昔もそうさ。俺の願いは一つ。柚子ねえが帰つてくることだ」

俺が十四歳のとき、十八歳の柚子ねえは姿を消した。俺は最後に見た佐々木柚子の後ろ姿を思い出す。

ゲームをやって、願いが叶うのなら世話がない。

それでもまあ、少しごらいは遊んでみるかと思った。

とにかく暇で暇で仕方がない。俺はリンクをクリックして、アプリをインストールする。起動してタイトル画面を見た。

『Eゲーム』の文字が金色で書いてある。フォントはブラックレターボディだ。修道院などで使われていた写本書体を模したものだ。

タイトルのバックは黒色の背景になっていた。なにか薄いグレーで模様が入っているが、よく分からぬ。画面の下には「スタート」と書いたボタンがある。これを押せば、はじまるのだろう。

「ソシヤゲとは、なんか雰囲気が違うな」

会員制クラブに入るための会員証、あるいは秘密の儀式に参加するための招待状みたい



だ。まあ、いい。誰か客が来るまで進めてみよう。スタートボタンを押すとダイアログが表示された。

——このゲームを開始すると、めくるめく性愛の日々がはじまります。ゲームではチャレンジが表示され、あなたがクリアすればポイントがたまります。10000ポイントをためると、願いが一つ叶います。本当にゲームをはじめますか。

——はい／いいえ

俺は「はい」のボタンを押す。その瞬間、スマホの画面が闇に染まった。暗黒の井戸を思わせる暗い空間が、スマホの画面の上に浮かんだ。

一瞬、世界から光が消えた。完全な闇の中で、俺の体がほのかに光っている。光の輪郭がぐにやりとゆがんだ。自分の体が分解されて再構成されたような気がした。

気がつくと、先ほどと同じようにスマホをのぞきこんでいた。今見た光景は幻だったのか。あまりにも暇すぎるから、ぼうつとしていたのか。俺は気を取り直して、画面に表示されている内容を確認した。

一番上にキャラクター情報と書いてある。最初の情報は名前だ。相田貴美／アイダタカミになつていて。自分の名前を一文字変えたキャラクター名だ。端末から情報でも読み取ったのだろう。

性別は女性になつていて。ちょっとエッチなゲームと書いてあつたが、女の子になりきつて遊ぶのか？ どこかに、名前や性別を変える設定があるのかもしれない。あとで調べ



てみようと思った。

「他には、なにがあるんだ？」

体力35、知力40、性欲50、後悔100。

俺は一瞬、目の動きを止めた。なぜ後悔なんていうパラメーターの最後にはポイントという項目があった。

—0／10000

現在ゼロのこの値を、一万まで上げるのがこのゲームの目的だ。

項目と数値が並んだリストの下に「チャレンジリスト」というボタンがあった。これを押して、チャレンジをこなしていくばポイントが入るんだな。RPGのクエストみたいなものかと思う。

ボタンを押すと画面が変わり、リストが表示された。

——鏡を見る。1. ポイント。

——胸をもむ。2. ポイント。

——股間をさわる。3. ポイント。

俺は画面を見渡す。なにかキャラクターが出て操作するのではないのか。もしかして自分でやれというのか。

「えー、マジかよ」

テキストの指示があるだけのゲームなのか？　さすがに手抜きすぎだろうと思い、スマ



ホをカウンターの上に放り出した。

「はあっ」

やっぱり暇だ。

暇潰しのためにインストールしたゲームなんだから、少しごらいはプレイしてやるか。

「ええと。鏡を見れば1.ポイントなんだな」

俺はカウンターの下の引き出しを開けて、手鏡を探して自分の顔を見た。そこには、俺の顔とは異なる顔が映っていた。

小さな頭、華奢なあご、目は大きく、まつげが長かった。髪の毛は肩よりも長くなっている。首は細くなり、肩幅は狭くなり、胸は豊かに膨らんでいた。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『鏡確認』を達成しました。相田貴美は1.ポイントを獲得しました！』

カウンターの上に置いたスマホから、大きな声が流れてきて俺は驚いた。

えつ、いったいどうなっているんだ？ 俺が女になっている？ そして鏡を見たらポイントが入った？

これは魔法なのか、それとも宇宙人や異世界人のテクノロジーなのか。少なくとも、現在の地球の技術では、こうした現象を引き起こすことはできない。

「いちおう、他のも試してみるか。胸をもむと、股間をさわるだな」

俺は胸をもみ、股間をさわった。胸には大きなおっぱいがあり、股間には男性の棒と球



がなかつた。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『胸もみ』を達成しました。相田貴美は2ポイントを獲得しました！』

『コングラチュレーション！ チャレンジ『股間さわり』を達成しました。相田貴美は3ポイントを獲得しました！』

顔を上げて周囲を見回す。誰かが監視しているのではないかと思ったが、周囲には誰もない。あるいは隠しカメラが仕掛けられているのかもしれないが、いたずらにしては手がこみすぎている。

いずれにしても、自分の姿が女になつたことは説明が付かない。

チャレンジリストの画面が変わつた。クリアしたチャレンジが消えて、新しいチャレンジが現れる。

——一番目に来た客の手を握る。3ポイント。

——一番目に来た客とキスをする。10ポイント。

——一番目に来た客に、セフレにしてくれと言う。20ポイント。

「いやいや、ちょっと待て。いきなりハードルが上がりまくりだろう！」

俺は髪をかき上げて頭をかいた。この調子で一万ポイントを稼ぐなんて無理だろう。アンインストールするかと思い、ホーム画面に戻り、操作をしようとする。

「あれ、できないぞ」



端末に最初から入っていたアプリだと、たまにアンインストールできることもある。しかしこれは自分でインストールしたものだ。

カウンターに肘を突き、これまでの不可解な出来事を検討する。もしかして、1万ポイントを集めると、本当に願いが叶うのか？

俺の願いは一つしかない。十年前からずっと同じだ。

俺は六年前に高校を卒業した。その頃、佐々木のおばさんは、店をやめようとしていた。俺はおばさんに無理を言つて、住み込みの店員にしてもらつた。そのおばさんは今、病院で療養中だ。現在俺は、一人で店を切り盛りしている。

店の入り口の来客チャイムが鳴つた。最初に来た客だ。チャレンジリストの指示は二番目だから違う。俺は顔を上げて思考を巡らせる。俺の姿は他人からどう見えるのか確かめたかった。

ガラスの扉を開けて入ってきたのは、山の中腹に住んでいる田中のおばあさんだ。田中さんは、俺の顔を見て怪訝な顔をした。

「新しいバイトさん？ 貴義くんは？」

俺の姿は相田貴義には見えないらしい。やはり俺の姿は変化している。

「アルバイトです。相田さんは、佐々木さんの病院に行っています」

自分の声が、男のときと違い、高くなっていることに気づいた。

「あらそう。だからバイトを」



「ええ、そうなんです。あの、俺の——私の姿、どう見えますか？」

他人の目にどう映っているのか知りたくて尋ねた。

「どうって、服はちょっとぶかぶかすぎない？若い人の服のことはよく分からないけど、そういうの流行っているの？」

「男に見えますか、女に見えますか？」

まどろっこしいので、ストレートに聞いた。

「男装？しているのかもしねいけど、髪も長いし、体付きも分かるし、女性にしか見えないけど」

やはり、俺の姿は女性になつてているのだ。

田中のおばあさんは、ちょっと大丈夫かしらという顔をしたあと、ブツブツと言ひながら食料品をいくつか買って店をあとにした。

俺はチャレンジリストをふたたび確認する。「二番目に来た客」と書いていた理由が分かった。一番目に来た客に、自分の性別が本当に変わったかを確認させて、その自覚の上で行動させるためだ。

俺はチャレンジリストをじっと見る。

——一番目に来た客の手を握る。3ポイント。

——一番目に来た客とキスをする。10ポイント。

——一番目に来た客に、セフレにしてくれと言う。20ポイント。



心臓が激しく鳴っている。自分が女だと自覚すると、この三つのチャレンジの意味が分かつてきた。

店の入り口の来客チャイムが鳴った。店に来るのは、いざれも俺が知っている相手だ。

俺は緊張して顔を向ける。

「こんにちわー、遠野でーす」

のんびりとした声とともに、スース姿の和樹が入ってきた。

俺はどう振る舞えばよいのか分からず混乱する。じじばばならともかく、近い年齢の男が俺を見て、どう思うか予想ができなかつた。

和樹は、区役所の地域振興課に勤めている。だから、地元の商店を回つて、いろいろな話をするのも仕事の一環だ。

俺はカウンターに肘を突いたまま、和樹の様子を観察する。さきほどのおばあさんと似たような反応をするのかと思いながら第一声を待つた。

和樹は、俺のいるレジを見て不思議そうな顔をする。そしてレジまでまっすぐ歩いてきて、俺の顔を見下ろした。ふだんなら見つめられても気にしないが、自分の体が女になつていると思うとドキドキする。

いや、こいつの恋愛対象は、女ではないはずだと思い直す。

三年前、こいつが高校生のときに男の俺は告白された。だから今の俺がドキドキする必要はない。



「あの、女性の方に聞くのはおかしなことなのですが……、えーと、こういうことは絶対にないことだと理解しているのですが……、もしかして、あなたは貴義さんですか？ 相田貴義さん。……女性の方が貴義さんなわけはないのですが」

悩むように和樹は聞いてきた。

「マジかよ」

俺は思わず声を漏らす。和樹は、ほっとした顔をしたあと、心配そうな表情に変わった。

「本当に貴義さんなんですね？」

「そうだ」

「どうして、女性の姿に？」

俺は経緯を説明した。和樹は黙つて俺の話を聞いた。

「戻り方は分かるんですか？」

当然の質問だ。ふつうなら、この異常な状況からの脱却を願う。

「一万ポイントを集めると願いが一つ叶うそうだ。それで戻ることが可能なんだろう。だ

が、俺は他の願いを叶えたい」

俺は唇を噛む。自分がバカなことを言つている自覚はある。俺は和樹の反応を待つた。

「俺に、なにができますか？」

和樹が真剣な顔で尋ねてきた。俺は驚いて和樹の顔を見上げた。

「俺、三年前にも言いましたよね。貴義さんのことが好きだって。性別や見た目なんか関



係ありません。俺は貴義さんの力になりたいんです」

「どうして、そんな」

「どう考へてもおかしいだらうと思ひ尋ねる。

「中学三年生のとき、サッカー部でレギュラーが取れず、落ち込んでいた俺を励ましてくれましたよね。あのときから、貴義さんのことが好きなんです」

和樹が十四歳の頃のことだ。三年間レギュラーになれず、部活の仲間と顔を合わせたくなかつた和樹は、下校ルートを変えてこの店に来た。そのとき俺は、この店で働きはじめたばかりだつた。

十四歳という年齢を聞いて無視できなかつた。親身になつて話を聞いてやり、和樹の感情に寄り添つた。それ以来、和樹は俺になつき、高校二年生のときに、付き合つて欲しいと俺に告白してきた。

俺の頭に一つのアイデアが浮かぶ。和樹の感情を利用して、俺の願いを叶えるための手伝いをさせればいいのではないか。

俺は右手を差し出す。

「俺の手を握つてくれ」

「手ですか？ 分かりました」

和樹は俺の手をしつかりと握つた。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『手を握る』を達成しました。相田貴美は3ポ



イントを獲得しました！』

スマホから女性の声が流れる。和樹はじっとスマホを見て口を開いた。

「これが、チャレンジの達成ですか？」

「そうだ。このポイントを一万集めないといけない」

「先は長そうですね」

「そうだな」

俺は和樹を見上げ、呼吸を整えて次の言葉を告げる。

「俺にキスをしてくれ」

和樹の反応を窺うと、顔を真っ赤にして硬直した。

「あの、それは——」

「10ポイントなんだ。『Eゲーム』は、こういうことを重ねていくんだ」

和樹は考えているようだった。なにを考えているのかは分からぬ。きっと自分の数年間の感情と折り合いを付けているのだろう。

「分かりました。貴義さんとキスできるなら、拒む理由はありません」

「貴美だそうだ。この『Eゲーム』で俺が演じる女性は、そういう名前らしい」

和樹は深呼吸をする。頭を必死に切り替えているのだろう。

「貴美さん、キスします。俺のファーストキスです」

俺のあごに手を添え、少し上に向かせて顔を近づけてきた。俺は目をつむる。和樹の息





が感じられる。唇が重なった。他人の肌と触れあつていることを実感する。静かな時の中で、たがいの体温を感じあつた。

どれぐらい長いあいだ唇を重ねていただろう。あごに手を添えたまま、和樹が顔を引いた。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『キス』を達成しました。相田貴美は10ポイントを獲得しました！』

スマホから音声が流れる。俺は慌てて、あごに添えられた和樹の手から体を引いた。和樹だけでなく、俺もファーストキスだった。

「おっ、10ポイント獲得できた。どうやつて感知しているのか分からんんだよな、このアプリ」

俺はスマホに手を伸ばして、わざと明るい声を出した。

チャレンジリストは一つ消えた。その代わりに新しい項目が追加された。

——一番目に来た客に、セフレにしてくれと言う。20.ポイント。

——セフレとディープキスをする。5ポイント。

——セフレとセックスをする。100ポイント。

なにがなんでも、セフレと言わせようという強い意志を感じる。

俺と和樹のあいだには淫靡な空気が漂っている。レジのカウンターだけが、男と女の距

離を遮つてゐる。



「あのな、和樹」

「なんですか、貴美さん？」

「俺をセフレにしてくれ」

心臓が爆音で鳴っている。目の前の和樹は、耳まで真っ赤になつていて。たがいの心臓の音で、店内が埋まつていていた。

さすがにまずかったかもと反省をはじめた。

「なあ、和樹……」

「俺は、貴美さんの恋人になりたいです。セフレではなく恋人に。でも、貴美さんが一万ポイントをためて願いを叶えるのに必要なら、どんな立場でもいいです。協力させてください」

『コングラチュレーション！ チャレンジ『セフレ発言』を達成しました。相田貴美は20ポイントを獲得しました！』

スマホの声が、どこか遠くで響いているように感じた。

俺はチャレンジリストをちらりと見る。セフレ発言が消えて、残り二個になつていて。全てクリアするまで先には進めないのかもしれない。

俺はあごを上げて目をつむる。

「ディープキスをしてくれ。どんなか分からないが、舌を入れたりするんだよな？」

俺は濃厚な接吻を求めた。



頬を両手で覆われた。和樹が唇を重ねてきた。先ほどのような軽い触れあいではない。たがいに口を開いて、濃厚に舌をからめあう。まだ、二人ともぎこちなかつた。和樹は、優しく俺の舌をなめてくれた。目をつむつたまま俺も応える。軟体動物の交尾のように舌同士を這わせ、唾液を交換した。

俺は、そつと目を開いた。和樹は目を閉じていた。俺はふたたび目をつむり、和樹とのキスを継続した。

長い時間を経たあと、俺たちはたがいから離れた。なんとなく気まずくなり、髪をかき上げてそっぽを向いた。

「貴美さん、その癖、女性になつても変わらないんですね」

「は？ なんの癖だよ」

「気まずくなつたり、恥ずかしくなつたりすると、髪をかき上げるじゃないですか」

「えっ？」

気づいていなかつた。羞恥で顔を真っ赤に染めながら髪をいじり続けた。

「次はなんですか？ 俺、とことん付き合いますよ」

和樹が照れくさそうに言った。

俺は自分の顔を右手で隠して、スマホの画面を和樹に向けた。そこには、最後に残つたチャレンジが表示されている。俺は顔を隠したまま、そのチャレンジの内容を口にした。
「セフレとセックスをする。100ポイント」





和樹があたふたしているのが分かる。俺は右手の指の隙間から、ちらりと和樹の様子を窺う。セックスできることに素直に喜んでいる顔ではない。こうした形で結ばれることへの戸惑いが浮かんでいる。さまざま感情がないまぜになり、行動に移せない様子が見てとれた。

俺の方が四つ年上なんだ。それに、これは俺のわがまだ。

「すまなかつたな。こんなことを急に言つて。忘れてくれ。俺が悪かつた」

両手をカウンターの上に置き、頭を下げる和樹に詫びた。顔を上げて様子を見ると、和樹は下向き、拳を握っていた。

「店の入り口のプレートを閉店にしてきます。セツクスをしているときに、他の人が来た
ら困ると思いますから」

「あ、ああ

和樹は大股で店の入り口に行き、プレートを逆向きにして戻ってきた。

「そ、
そ
う
だ
な
」

なにも考えていなかつた。さすがに店の中でやるわけにはいかないだろう。そんな変態行為をしたら人として終わつてゐる。

「じや、じやあ一階の寝室で

「し、失礼します」



二人とも、動きがぎくしゃくしている。靴を脱ぎ、一階の居住スペースに上がり、階段へと向かった。

六年前、住み込みで働きはじめたときに、部屋を一つ借りた。商店のオーナーである佐々木おばさんが入院してからは、この家全体を使っている。

俺が先導して階段をのぼる。和樹は何度も店に来ているが、二階に上げたことはない。階段がきしむたびに、和樹が付いてきていることを意識する。和樹は、俺の姿を下から見上げている。大きくなった臀部が、ちょうど和樹の顔辺りにあるはずだ。恥ずかしさで、体温が二、三度上昇したのではないかと思つた。

「こ、ここが俺の部屋だ」

扉の前で和樹に紹介する。一万ポイントを稼ぐためのチャレンジが、性的な内容ばかりなら、これからこの部屋で多くの時間を過ごすことになるだろう。

ドアノブを回して中に入る。殺風景な部屋には荷物がほとんどない。なにかを買って楽しむ気にはなれなかつた。そうした人生を享受できなかつた人がいるからだ。

「この部屋は、空き部屋だったんですか？」

俺が居候だと知つていて和樹が尋ねてくる。

「ああ、柚子ねえの荷物置き場だつた。俺が住み込みすることになつて空けてくれたんだ」

「柚子さんって、十年前の」



俺は和樹に視線を向けた。無言の圧を感じただろう、和樹は口を閉じた。
俺は上半身の服を脱ぎ捨て、ズボンとパンツも下ろして裸になつた。

「なんだよ、じろじろと見て」

「きれいですね」

「お、おう」

俺は髪の毛を指でかき上げた。そして、ちらりと和樹を見て、「おまえも脱げよ」と、
うながした。

和樹はスーツをていねいに脱いで裸になつた。中学、高校と運動部だつたため、体は筋
肉質だつた。

「おまえ、勃起しているじゃないか」

「俺の恋愛対象は、男性つてわけではないですから」

「じゃあ、なぜ俺に告白を？」

「好きな相手に性別なんて関係ないじゃないですか」

和樹はゆっくりと裸の肌を重ねてきた。立つたまま、たがいの体を抱き締める。

俺はベッドの上に寝かされた。そしてぎこちなく下半身を愛撫された。

最初はくすぐったかったが、しだいに気持ちよくなってきた。指が股間の一点に触れる

たびに、思わず声が漏れた。

「貴美さん、クリトリスに触れるたびに声を出している」



和樹に言われて、それが女性の陰核なのだと気づく。

「濡れているのか？」

「指、見ます？」

顔の前に出されて、両手で触れて確かめる。ぬるぬるしている。ゆっくりと指を離すと糸を引いた。

「これが、愛液ってやつか」

「そうだと思います。もう入れますか？」

「ああ。……それで、痛いのかな？」

「分かりません。俺には経験がないですから」

「そりゃあ、そうだよな」

たがいに少し笑つたら緊張が解けた。和樹が俺の女性器に亀頭を当てる。熱を帯びたものが触れたのが分かった。何度もペニスを上下させたあと、わずかに先端が奥へと押しされた。膣の入り口を見つけたのだろう。

どれぐらい痛いのだろうかと思つていたが、わずかな痛みしかなかつた。個人差があるのだろうか。その一瞬の痛みもすぐに消えた。

下腹部では、異物感と快感がないまぜになつていた。

ゆっくりと挿入して引き抜かれるたびに、神経のひだをなでられているようだつた。へその下に両手を添えて目をつむる。入り口から奥までの様子を想像する。



徐々に感覚が鋭敏になってくる。和樹のペニスの形が明瞭に分かるようになる。膣のどの位置を動いているのか探ろうとする。カリを刺激するようにならぬことを締めつけることもできた。

もしかしたらこの体は、『Eゲーム』用に特別エロく作られているのかもしれない。膣内を締めて、ペニスをしごくたびに和樹が短い声を上げる。それが面白くて、何度も締めて、ゆるめて、を繰り返した。

だんだん和樹が愛おしくなってきた。俺は和樹の背中に手を回して自分に引き寄せる。肌をぴたりと密着させて、ぬくもりとにおいを堪能した。和樹が逃れられないよう、足をからめて拘束する。セフレなのに恋人のように性器を重ねる。

「貴美さん、出てしまいそうです」

「いいよ、出しな」

性行為をするための肉体。それならば精液を膣内で受け止めるべきだろう。

なぜそう思つたのかは分からぬ。次の瞬間には、和樹の亀頭が大きく膨らんだ。

「んっ」

思わず声を漏らした。体全体がきゅうっと収縮して、和樹に抱きつく。膣の奥に熱い塊が放出された。

俺が知つてゐる精液は、液体と粘液の中間のようなものだ。しかし腹の中に出されたものは、ゼリーのように弾力があるものに感じた。





「はああつ、はああつ」

酸素を取り入れようとして大きく息をする。和樹がお尻をなでてきた。なんでセツクスのあいだではなく、終わってからなでるんだよと思つた。

一尻が好きなのか?

「いや、もちもちで、すべすべで、なでてみたくなつたので」

—なんだよそれ

くすくすと笑い声を漏らした。

『コングラチュレーション！ チヤレンジ『セックス』を達成しました。相田貴美は10.0ポイントを獲得しました！』

ベッドに置いたスマホから声が聞こえてきた。短い時間でいろいろとしたり、一万ポイントにはほど遠い。だが人間の性別を一瞬で変えられるアプリだ。俺の願いを叶える力もきっとあるはずだ。

「貴美さん。叶えたい願いってなんですか？」

俺の協力者になつてくれた和樹が、遠慮がちに聞いてきた。

俺はしばらく無言で和樹を抱き締める。膣内に、精液とペニスを入れたまま考える。

「そのうち言うかもしね。俺の心の整理が付いたらな」

「分かりました。そのときまで待ちます」

和樹は俺に優しかった。その優しさがトゲとなり、俺の心にチクリと刺さった。



「全部のチャレンジリストをクリアしたから、新しいチャレンジが追加されたんじゃないですか？」

「そうだな」

俺は手を伸ばして画面を見る。タイトル画面に戻っていた。あるいは今までチュートリアルモードだったのかもしれない。ここからが本番なのだろう。

タイトル画面の「E」の文字の上に、数文字の単語が追加されていた。

— Estrus

「知っているか、この単語？」

俺は和樹に画面を見せた。

「発情期だったと思います」

「おまえ、よく知っているなあ。辞書のエロい単語に、赤線とか引いていたタイプか？」
恥ずかしそうに和樹はうなずいた。

「マジかよ」

冗談で言つたのだが、本当だつたとは。

「それにしても——」

発情期ゲームか。ちょっとエッチなゲームという触れ込みだつたが、こいつはガツツリ性交させるのが目的じやねえかよ。

「どうしたんですか、貴美さん？」



「うん？　ああ、そろそろ抜いてくれないか？」

「すみません」

和樹はペニスを抜き、ベッドの周りを見渡してティッシュペーパーの箱を引き寄せる。和樹は、俺の股をていねいにふいてくれた。

こうして、俺と和樹の『Eゲーム』生活は幕を開けた。





第3章

神隠しの夜

